

ボールあそびの集い

団体名●丸井ゼミナール／代表者名●横井詩苑(人間科学部こども学科・3年ゼミ長)

はじめに

近年、インターネットや電子機器、ゲーム機の普及により、児童の遊びの形は、公園や校庭などで遊びののではなく、年々変わりスマホゲームなど室内遊びが多くなってきている傾向が見られる。それに伴い、運動能力の低下や、仲間と一緒に運動する機会が減っている。そんな中で我々は、発育・発達が著しい時期である小学生の児童に、多種多様な「ボール遊び」を通じて、学びや成長を促すと同時に、体を動かすことの楽しさや魅力を感じてもらうため、運動の習慣作りの一つの方法として、定期的に遊びの場を設ける活動を行った。

活動内容

本学のハンドボール部の協力を得ながら、週に一回の活動を行った。その日の活動内容を学生が考えるのはもちろん、それだけではなく、その場で児童に何をしたいのかを聞き、児童の意欲をあげることや一緒に活動を形作っていくことを軸として活動を行った。準備運動では、ボールを使って「ボール運びリレー」をしたり、「だるまさんが転んだ」「じゃんけん列車」などのボールを使うことにとらわれず、多種多様な運動を行った。「ドッチボール」「サッカー」などのチーム別や全体で行う遊びや「鬼ごっこ」などの運動を通して、新たな発見や学びを感じることができる場を作ることを常に意識していた。

また全体で遊ぶことで、周りの人のことを考える協調性などを感じることができ、例えば、「ドッチボール」で同じ人ばかり投げないように譲り合うなど。この活動では楽しさだけでなく、人としての成長を、スポーツを通して感じてもらえるよう活動を行った。



図1 ドッチボールをしている様子

成果、結果の考察

学校の間ではなく、相手が学生であったり、学生の「聞かせ方」が身に付いておらず、説明時に時間がかかってしまったり、分かっていない子がいた。しかし、回を重ねながら。どうすればより良い活層をしていけるか考え、次第に児童たちへの聞かせ方や児童に満足してもらえる時間が多くなっていったように感じている。

活動中は児童は夢中で活動に取り組み、意欲的に運動を行っているため、この「ボール遊び」のような運動する場を設けることで児童のスポーツ・体を動かすことの関わりが増え、仲間と一緒に運動することができた。はじめに述べたように、運動能力の低下などを運動をする場を設けることで体を動かすことの楽しさや魅力を感じたり、運動の習慣作りに繋がっていると感じている。

今後の課題、展望

活動内容をその場で児童に聞いて行う形を軸としているが、どうしても毎回の活動内容に偏りが出てしまうことが多く見受けられた。そのために児童の意見を取り入れつつも、多種多様な運動に触れてもらいたいために児童の興味を引きやすい活動内容を考えたりするなどの試行錯誤を行っていききたい。そして、まだ説明時などに話を聞いていない子がいたりするのでそのような指導も今後の課題としていきたい。

また、活動の目的の一つでもある運動の習慣化を進めていくためにも、継続的に運動のできる場の提供を行っていきたい。



図2 説明をしている様子